

宮沢賢治「北守將軍と三人兄弟の医者」に見られる中国古典について

— 晩唐の詩人張蠙の五言律詩「過蕭關」の紹介 —

顧 羽 寧 鈴木 健 司

一 はじめに

「北守將軍と三人兄弟の医者」における先行研究は、決して少ないというわけではない。ただ、それらの多くが、いわゆるモデル論的な研究であり、本格的な作品論が展開されてきたとは言えないだろう。本作の舞台は古代中国と推定され、そのため〈西域もの〉の一つとして区分されるのが通常だが、他の〈西域もの〉との類似性は少なく、内容も極めてユニークである。その結果として、これまで研究者は、モデル論的研究に向かわざるを得なかったとも言える。

本論もまた、モデル論の範疇の一つになる。「北

守將軍と三人兄弟の医者」に用いられた中国古典の明確な典拠として、晩唐の詩人張蠙の五言律詩「過蕭關」の紹介をするが、将来作品論へと展開するための基礎的資料の一補完を目的とする。

二 モデル論としての先行研究

これまで、積極的に中国古代の歴史と照らし合わせ、説得力のある分析を試みたのは、多田幸正（『賢治童話の方法』勉強社、一九九六）だろう。

多田は橋瑞超の『新疆探検記』（民友社、一九二二）を用い、作品における〈西域〉に関する具体的な表現との類似性を分析した。また、范曄編『後漢書』に記される班超を、賢治がソンバーユー

の造形にあたって最も参考にした武将であるとし、班超の伝記の輪郭部分を借りたのではないかと指摘している。

王敏（『宮沢賢治と中国—賢治文学に秘められた、遙かなる西域への旅路』国際言語文化振興財団、二〇〇二）もまた、積極的に「北守將軍と三人兄弟の医者」に関し発言をしている。特に『唐詩選』との関わりを中心に、これまで不明とされてきた多くの語彙や場面の解釈を試みた。北守將軍ソンバーユーと曹霸將軍との類似性や「ラユー」という都の名と中国「洛陽」との関係、北守將軍の乗る白馬のモデルに関する推定などである。ただ、賢治テクストの直接的な典拠といえるものは指摘されていないようだ。また、王が指摘する盧綸の詩「和張僕射塞下曲」についてだが、多田論でも言及されているが、倉田卓次（『思い出の美少年』『墓一つづつ賜はれと言へ—遠藤鱗一郎 遺稿と追憶』青土社、一九七九）がすでに指摘している事柄である。天沢退二郎も『新修宮沢賢治全集』第十三卷（筑摩書房、

一九八〇）の「後記」でそのことを記している。

三 「狐」と「砂鶻」

北守將軍は凱旋後、王様への拝謁を願ったが、長い年月馬上で戦ったことにより、身体が固まり馬から降りることができなくなっていた。北守將軍は身体を治療し、できるだけ早く王様に拝謁するため、三人兄弟の医者のところへ行く。北守將軍の話によれば、戦場の砂漠には狐と砂鶻という非常に厄介な動物がいて、散々な目にあつたという。その場面を、次に引用する。

「あなたはそれで向ふの方で、何か病気をしましたか。」

「い、や、病気はしなかつた。病気は別にしなかつたが、狐のために欺されて、どうもときどき困つたぢや。」

「それは、どういふ風ですか。」

「向ふの狐はいかんのぢや。十万近い軍勢を、

たゞ一ぺんに欺すんぢや。夜に沢山火をともしたり、昼間いきなり砂漠の上に、大きな海をこしらへて、城や何かも出したりする。全くたちが悪いんぢや。」

「それを狐がしますのですか。」

「狐とそれから、砂鶻ぢやね、砂鶻というて鳥なんぢや。こいつは人の居らないときは、高い処を飛んでゐて、誰かを見ると試しに来る。馬のしつぽを抜いたりね。目をねらつたりするもんで、こいつがでたらもう馬は、がたがたふるへてようあるかんね。」

二種類の動物のうち、狐はそれほど珍しくなく、世界各地に存在しており説明の必要はないだろう。その一方、砂鶻という動物は一般的とは言いがたい。原子朗『定本宮澤賢治語彙辞典』（筑摩書房、二〇一三）には、「鶻はワシタカ目ワシタカ科の小型のハヤブサ（隼）類の漢名。砂鶻は砂漠地方に棲むタカのことをさす」とあるが、賢治はなぜ「砂

鶻」の存在を知っていたのか、その点についての記述はない。

諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館書店、一九五九）では、「沙地のくまたか」と説明されている。また、「漢語大詞典」（漢語大辞典出版社、上海、一九九四）では「栖息于沙漠地带的鷲鳥」とあり、〈砂漠地帯に栖息する鷲〉ということである。

鷲か鷹か、隼か、文献的には決着はつかないが、猛禽類であることは確かなようだ。最も重要な点は、鳥の名称にあるわけではなく、賢治はなにゆえ「砂鶻」という一般読者にとつて親しみのない鳥を登場させたのか、または登場させることができたのか、ということであろう。この点に関し筆者は、唐の詩人・張蠙の詩「過蕭關」を賢治が読んでおり、そこから借用したのではないかと推定している。

過蕭關

張蠙

得出蕭關北 儒衣不稱身

隴狐來試客 沙鷗下欺人
曉戍殘烽火 晴原起獵塵
邊戎莫相忌 非是霍家親

この詩の領聯には、まさしく砂漠での「狐」と「砂鷗」が二つとも記されている。中国語では「砂」と「沙」は同音同義であり、「沙鷗」は「砂鷗」と同じであると言つてよい。

賢治にとつて詩（漢詩）は、親しみやすいものであつたようだ。結城蕃堂編『和漢名詩鈔』（文会堂書店、一九一五）との関わりについて、次に示す。

四 賢治と漢詩

奥田弘『宮沢賢治 研究資料探索』蒼丘書林、二〇〇一）に、「宮沢賢治と『和漢名詩鈔』——その詩歌への投影について」という論考がある。

賢治が、この『和漢名詩鈔』を手にしたのは、盛岡中学校四年生の時である。彼が、この本を

知つた経緯は不明であるが、おそらく、教師か級友の推奨によるものである。前述のように、重版・続編の刊行状況から推測して、当時の全国、中等学校生徒間では、ベストセラーとなつていたものと想像される。（因みに、同じ文会堂発行の森塊南著『漢詩講義』下巻（大5・1・17刊）掲載の広告欄『続和漢名詩鈔』広告文に「前篇十萬部発行、洛陽の紙価を高からしめる」云々とある）

前述の書簡には引用しなかつたが、その後半に「三月頃より文学的なる書を求め可成大きな顔をして歌など作る」という箇所がある。このような文学少年になつていたことから察して、『和漢名詩鈔』からの影響は、相当あつたことが考えられる。

奥田の考察は、賢治の短歌や詩の創作への漢詩の影響を採つたもので、「北守将軍と三人兄弟の医者」への言及はないが、賢治を含むその当時の若者の漢

詩への興味・関心度を知る手がかりとして参考になる。ちなみに、張蠙の「過蕭關」は『和漢名詩鈔』に収められてはいない。また、賢治が確実に読んでいたと推測される『唐詩選』にも「過蕭關」は収録されていない。では賢治はどのようにして「過蕭關」を知ることができたのか。

その詩は『三体詩』に収録されているのである。『三体詩』は、南宋の周弼により編集された詩集で、『唐詩選』が初唐や盛唐の詩を中心に収録しているのに対し、『三体詩』は中唐から晩唐にかけての詩が重点的に選ばれている。作詩の教本として編集され、日本でも漢詩を作る人たちの多くが愛読していたという。明治期としては石川鴻斎述『三体詩講義』（寛裕舎、一八八五）や大田才次郎述『唐詩選 三体詩講義』（博文館、一八九三）、野口寧斎著『三体詩評釈』（進々堂、一八九四・郁文舎、一九一〇）などが刊行されている。

一方、賢治の所蔵図書目録（境忠一『評伝・宮沢賢治』および奥田弘「宮沢賢治の読んだ本」―所

蔵図書目録補訂―）の中に『漢文大系』（富山房、一九〇九）が確認でき、その第二巻に『三体詩』が収録されている。また、大正期になって出版された『國譯漢文大成』（国民文庫刊行会、一九二一）にも『三体詩』は収録されており、詩句の解釈などかなり丁寧に記されている。

賢治はどの『三体詩』で「過蕭關」を読んだのか。確定的なことは言えないが、蔵書本である『漢文大系』の可能性は高いと考えられる。『漢文大系』には訓点が施されており、詩を読み解くために必要程度の注釈も記されている。むしろ、賢治が他の『三体詩』を読んだと仮定しても問題は無い。ここで指摘したいことは、どの『三体詩』を読んだかではなく、句の改変というところにある。

五 賢治による改変

詩「過蕭關」の書き下し文を『國譯漢文大成』に従って記せば、「蕭関の北に出るを得たり、儒衣身に稱はず、隴狐来つて客を試み、沙鷗下りて人を欺

く、曉戎烽火残り、晴原獵塵起る、邊戎相忌むこと莫れ、是れ霍家の親にあらず」となる。注意して読むと、「北守将軍と三人兄弟の医者」と少し異なる点のあることに気づく。

それは領聯にある「狐」が「試」み、「沙鶻」が「欺」くという組み合わせに関することだ。「北守将軍と三人兄弟の医者」では、「狐」が「欺」し、「砂鶻」が「試」す、という逆の組み合わせになっているのである。

ではその入れ替えはなぜ生じたのか。原典の組み合わせと、賢治作品での組み合わせを比較した場合、賢治の記す「狐」が「欺」し、「砂鶻」が「試」す、の組み合わせの方が、筆者の語感レベルでは理解しやすい。『漢文大系』では、この箇所は「実景」であると註されている。『國譯漢文大成』では「試」を「魅」と読み替えている点が注目される。いずれにせよ、基本的には原典の組み合わせ通りに解釈しており、それが当然なのであろう。筆者は漢詩の専門家ではないため、立ち入った即断は避けることに

する。念のため、石川鴻斎述『三体詩講義』（前出）、大田才次郎述『唐詩選三體詩講義』（前出）、野口寧斎著『三体詩評釈』（前出）での解釈も調べた。大田才次郎のものには「隴狐」、「沙鶻」に関する注は見当たらない。石川鴻斎と野口寧斎のものにはかなりの量の解説が付されていることが分かったが、賢治の解釈の元になった可能性は少ないと判断でき、引用は省略する。

大きな問題は、賢治が用いた組み合わせの場合、漢詩として平仄が整わなくなることである。したがって、賢治は訓読で理解していたのが自然である。賢治が自身の語感から解釈した結果として、「狐」が「欺」し、「砂鶻」が「試」す、の組み合わせになったのではないだろうか。

六 〈厭戦〉ということ

作品の冒頭で、北守将軍ソンバーユーが凱旋したとき、「塞外の砂漠」への言及がある。

北守將軍ソンバーユーは

いま塞外の砂漠から

やつとのことで戻つてきた。

勇ましい凱旋だと云ひたいが

実はすつかり参つて来たのだ

とにかくあすは寒い処さ。

三十年といふ黄いろなむかし

おれは十万の軍勢をひきゐ

この門をくぐつて威張つて行つた。

古代中国では、「塞外」は一般的に言えば、万里の長城より外の地域を指し、寧夏、内モンゴル、遼寧省、吉林省、黒龍江省およびモンゴル高原などの地域を含めている。では、「北守將軍と三人兄弟の医者」における「塞外の砂漠」は具体的にどこを指し示しているのか。前掲の『國譯漢文大成』では「蕭關」について、「蕭關」は甘肅省平涼府固原州なり、『漢書』の匈奴傳に孝文十四年、匈奴单于十四萬騎、朝那蕭關に入ると、漢代の蕭關は朝那縣

に在しなり、「得出蕭關北」長安に返らんとする路は必ず蕭關の北に出るものとす」と説明されている。蕭關は甘肅省にあるということだ。甘肅省は、古來、天山南北路に連なる東西交通の要路で、「過蕭關」との関連から推定するなら、「塞外」とは蕭關の外ということになる。

すでに検証したように、賢治が「過蕭關」を読んでいたことはほぼ確定的であるから、賢治は詩の背景と内容をそれなりに理解していたと考えてよい。詩における尾聯である「邊戎莫相忌、非是霍家親」に対し、『國譯漢文大成』の注釈では、「我は人種が別なりと云うて忌むこと莫れ、非是霍家親漢の將軍衛青は乃ち瞿去病の舅なり、嘗て匈奴を征して大いに克つ、武帝幕に就いて大將軍に拜す、衛青は即ち衛皇后の弟、去病は後の姉が子、匈奴の憎しむ所の者は乃ち霍家の親類にあり、然るに我れは霍家と縁なきのみならず、實は儒家にして、武人にあらず、幸に我を忌み我を畏るること勿れとなり」とある。「過蕭關」は「塞外」を舞台とした〈厭戦〉の

詩と言えるだろう。

九世紀半ばから一〇世紀初頭までの晩唐時期、唐は既に辛うじて余命を保つ時期に入り、全国各地で戦闘が起きていた。八五九年の裘甫の乱、八六八年の龐勳の乱、また八七八年頃から黄巢の乱に代表される諸反乱がそれである。この時代は、頻繁に起こる戦争によって、「塞外」の地をテーマとする詩が創り出された。「塞外」の地の風土への詠嘆、国を守るために戦っている兵士への尊敬、反戦の高揚する呼び声、また永遠の別れに対しての悲痛な気持ち、詩人たちの創作の素材になった。詩人張蠙は知識人として「賽外」の匈奴との戦争の悲惨さを感じており、同時に、世間の人々の運命を変えることができない自分自身の無力さも感じたことが察せられる。

七 結び

改稿に十年を要したという「北守将軍と三人兄弟の医者」だが、その期間は、シベリア出兵（一九一八年～一九二二年）の時期と重なっており、盛岡駐屯

の工兵隊などが、花巻で演習を行っていた事実もある。十年という改稿の年月が、賢治の戦争観をどのように変えていったかは、今後詳しく検証しなければならぬ課題であるが、原稿が最終的に雑誌「児童文学」（一九三一年七月）に掲載された時期を考えるなら、自国の利益しか考えず無謀な戦争に突き進んで行く政局の下、〈厭戦〉の思想として読み取れる詩「過蕭關」を、その一部なりとも自作品に取り入れている事実は、それなりの重みを持つ。筆者は「北守将軍と三人兄弟の医者」という作品に込めた賢治の意図を暗示するものとして、受け止めたいと考える。

宮沢賢治「北守将軍と三人兄弟の医者」に見られる 中国古典について

—晩唐の詩人張蠙の五言律詩「過蕭關」の紹介—

顧 羽 寧 鈴 木 健 司

Understanding the Influence of the Chinese Classics in Miyazawa Kenji's *Hokushushōgun to Sannin Kyōdai no Isha* through the Perspective of Zhang Bin's *Guo Xiao Guan*

GU, Yu Ning, SUZUKI, Kenji

该论文指出了《北守将军和三兄弟医生》中的“狐”、“沙鹊”与晚唐诗人张蠙的五言律诗《过萧关》具有一致性。另外，收录了《过萧关》的《三体诗》被记载在《汉文大系》中，而《汉文大系》（富山房，1909）第二卷可以在宫泽贤治的藏书目录中找到，因此宫泽贤治读过《过萧关》的可能性很高。

《北守将军和三兄弟医生》的修改花费了十年，这十年与西伯利亚干涉（1918年～1922年）时期重合。在本国利益至上，盲目投入战争的政局下，从被解读为“厌战”思想的《过萧关》中，选取一部分融入自己的作品，这个事实有相当的重要性。笔者认为，《北守将军和三兄弟医生》中包含了贤治“厌战”的意旨。